

共通教育英語科目に習熟度別クラス編成を 導入する際の克服すべき課題

松 島 欣 哉 (英語小部会)

はじめに

2006年10月25日、私は大学教育開発センター長の阿部文雄氏より、共通教育英語科目に習熟度別クラス編成を導入する件について検討するよう、依頼を受けた。その後の英語小部会での議論、12月5日に開催されたFD研修会での議論を踏まえ、習熟度別クラス編成に向けて、克服しなければならない課題について考察する。

1. 現行カリキュラムの総括について

現行カリキュラムは、2005年度(平成17年度)から始まった。このカリキュラムには、2年間の下準備を経て移行した。TOEIC試験の導入に向けて、2003年には教育学部の一部のクラスでTOEICのテキストを利用するパイロット授業をおこなった。そのフィード・バックを経て、2004年には全学1年生のクラスの半分(4単位の内2単位)をTOEICのテキストを利用した授業に切り替え、更に、教育学部1年生全員にTOEIC試験を試行的に受験させ、TOEIC試験の全学実施上の問題点を探った。この試行を経て2005年度に、全学1年生のクラスで、自習課題を課すとともに、TOEICのテキストを利用した授業を行い、全員にTOEIC試験を受験させる、という現行の体制を作り上げた。2006年10月には、この変更に対する学生(現2年生)の意識を探るべく、アンケート調査を行った。その報告・分析は今号の長井論文に掲載されている通りである。

自習課題に関する評価は、努力を強いられる学生側とその効果を高く評価する教授者側とでは、大いに異なる。また、TOEIC受験が学生の英語学習意欲に良い刺激を与えていることは顕著に見られるが、授業で利用するTOEICのテキスト(難易度)、或いは、テキストそのものの変更について議論する材料が、一回のアンケート調査だけでは乏しい。この調査は少なくとももう一回は必要であると考える。現行のカリキュラムの総括が終わらぬまま、十分な準備もなく、次の改編を行うのは余りにも拙速であろう。

2. 2年次クラスへの習熟度別クラス編成導入について

共通教育英語科目の授業に習熟度別クラス編成を導入するとき、1年次クラスだけにそれを導入しても、学習効果は余り上がらないと予想できる。学習効果を上げるためには、2年次クラスにおいて

も習熟度別クラス編成を導入する必要があるであろう。ところが、現行のカリキュラムでは、2年次クラスは、主題科目と同様に、シラバスに書かれた内容を基に学生が受講したい授業を選択する体制を取っている。

長井論文のアンケート調査分析によると、7割から8割の学生が現行の選択受講制に好意的評価を与えている。また、半分以上の学生がTOEIC試験に対応した授業には否定的で、現行の授業内容を期待している¹⁾。そうすると、単純に習熟度別クラス編成を2年次クラスへ導入する訳にはいかないであろう。学生の学習意欲を持続させるには選択制を維持し、学習効果を上げるには習熟度別クラス編成を導入するという、相反する制度を両立させねばならないが、これは至難の業である。当然、妥協点を探らなければならないが、どのような妥協が学习上最も効率が良いのか、検討しなければならない。これには学生の理解が必要であるから、新たな改編に関するアンケート調査は欠かせないであろう。

3. 評価基準の設定について

単位認定に於ける評価基準をどう設定するかは、大きな問題である。習熟度別クラス編成にした場合、上位クラスでは当然難易度の高い教材を使用しそれに見合った試験を行うことになり、下位クラスでは難易度の低い教材を使用しそれに見合った試験を行うことになろう。GPAを学生の評価に利用する機会（奨学金の授与等）が多くなるにつれ、学生はそれを意識するであろう。学部によっては、2年次の専攻決定において、GPAを利用していると聞き及んでいる。このような状況がある中で、上位クラスと下位クラスで、同じように「秀・優・良・可」という評価基準を当てはめるならば、上位クラスから不満が続出することが予想される。或いは、習熟度の高い学生が故意に placement test や TOEIC で低い点数を取り、下位のクラスで「秀」を取ろうとする、等のことも予想される。現在の学生気質を考えれば、習熟度の高い学生が、GPAを考えなくとも、下位クラスで努力することなく単位を取ろうとする例は少なからずあるのではないかと懸念される。後者の学生には、なす術はないが、前者の学生が出ないように、大多数の学生の同意が得られる評価基準をどう設定するのか、検討する必要があるだろう。

4. 習熟度別クラス編成導入の技術的問題点について

習熟度別クラス編成を行うにはどのようにしてその資料を得るべきなのかについて、他大学でどのように行っているのか実地調査をし、香川大学で実施可能かどうか、調査研究する必要がある。

たとえば、岡山大学のように、もし入学時に placement test をするならば、監督員を全学から抛出してもらわなければならないが、そのような合意は得られるのか。或いは、広島大学のように、センター試験の点数を自己申告させ、それを利用する場合、それを受験していない学生をどうするのか。センター試験を受験せず推薦入試で入学する学生にセンター試験の英語を受けさせることができるのか等々、全学的視野から検討すべきことは多々ある²⁾。その際、全学的協力が得られることは、基本

的条件となろう。

5. シラバスの書き替えについて

上記の多大な改編には、当然のことながら、『全学共通科目修学案内』の英語科目に関する説明の全面的書き替えを必要とする。それと共に、シラバスの書き替え（特に1年次クラス用）も必要となる。これらは、習熟度別クラス編成の導入の方法と単位認定に於ける評価基準の設定が確立されて初めて書けるものである。

おわりに

2006年12月5日に開催された共通教育FD研修会において配布された資料の中に、「新入生アンケートの分析紹介 — 補習教育の必要性をめぐって —」と題するものがあった。それによれば、学生が補習教育（remedial education）³⁾を希望する科目では、英語が第1位を占めた。その分析によれば、英語は「全ての学部で高校教育の理解度とは関係なく補習教育が必要であると考えられている」そうだ⁴⁾。

また、2年生へのアンケート分析を見れば、習熟度の低い学生の方が学力に見合ったクラス編成を希望していることがわかる。これらの点を考慮すれば、1年次および2年次のクラスで何らかの習熟度別クラス編成をすることが、学生のニーズに応えることになる。FD研修会に参加した教員からも多く賛成の意見が出された。

習熟度別クラス編成導入には、現行カリキュラムの総括、導入のための調査研究、評価基準の検討、必要があれば試行によるフィード・バック、『全学共通科目修学案内』およびシラバスの書き替え等々、課題が山積している。今後、大学教育開発センター内の外国語部でプロジェクトを組み、改編への提言に向けて、着実に調査・研究・検討がおこなわれる必要がある。

注

- 1) 2006年10月27日に開催された外国語科目部会で配布された、「『本学における外国語教育のあり方に関するWG』の結論」には、TOEICを4年一貫教育の中に組み入れて検討するとか、共通教育としての英語の授業全体でTOEICのスコアを上げる授業を構想すべきだと言う意見が出たことが報告されている。これは教員側の意見であるが、学生はそう思っていないという結果がアンケートから窺われる。会社員になる可能性が一番高いと思われる経済学部の学生でも、2年次の授業でTOEICに対応した授業を希望する者は、45%程度である。全学的に見て、7割から8割の学生がTOEIC以外の内容を希望している。なぜ学生がTOEICを嫌うのかについては、新たなアンケートが必要であるが、根本的には「英語はもういい」という意識があるのは想像できる。それに加えて、これは私見であるが、TOEIC試験の内容が日常生活での英語と商業英語を中心としているため、これまで高校で学習してきた内容との落差が激しく、興味が持てないのではない

だろうか。もし2年次の授業全体にTOEICのテキストを導入すれば、学生の学習意欲は下がりこそすれ、上がることはないであろうと懸念される。

2) この情報は、事務の方が電話照会によって得たものである。

3) 因みに、“remedial”という英語を日本語のカタカナ表記で示したとき、決して「リメディアル」とはならない。敢えてするならば、「リミーディアル」となろう。綴りに惑わされた誤記が定着したのであろうか。

4) 中西俊介「新入生アンケートの分析紹介－補習教育の必要性をめぐって－」。